



9784897



192013201

ISBN 4897-19201-3201-1

CO969

定価 1,100円

文芸春秋

20世紀メディア

よもやま話

購読会員限定ブログ記事再録集

高木秀子

赤見友子

阪本博志

梅村卓

松田さゆり

真野理央央見

小林真樹

谷合春代子

羽生浩一

芝田正央

吉原利志

北原誠

柳本真

吉原利信

加藤当規

野田真理

白井真竹

野田正史

柳本真

五條

村山雅

島村

渡辺直樹

渡辺直樹

赤村野矢子

藤志由浩

武田明美子

米河理央

真宮弘光

Intelligence 20世紀メディア研究所発行

Contents



「太平洋戦争とドナルド・キーン」展を見て	川崎賢子	2
昭南中央放送局に関する一資料について	土屋礼子	4
シベリア墓地再訪	山本武利	7
ベルリンにて、戦後70年を考える	鈴木貴宇	10
「緒方竹虎とCIA」とその後。テーマの広がり、研究動向から	吉田剛昭	14
ゾルゲ事件被告ヴェリツチ家のオーストラリア	加藤哲郎	20
「原子力平和利用博覧会」と「スーホの白い馬」	白山眞理	25
別府市立図書館にあった検閲済みスタンプの押された紙芝居	白土謙代	31
文化社と「東京復興写真集 1945～46」	井上祐子	35
初期「帝大新聞」の研究：	清水あつし	41
「帝大新聞」OBの情報局長・久富達夫について		
プロバガンダが生み出す「被害者一敵一受け賞のサイクル」	吉本秀子	47
大衆政治における、メディア、大衆、専門家： 戸坂潤の示唆するもの	赤見友子	50
「朝日新聞」「ひととき」欄から生まれた女中サークル	阪本博志	56
「希文会」の機関誌「あさつゆ」の復刻		
沙飛と日本人	梅村卓	62
ドイツで見た「日本文化」の祭典	松田さおり	68
「支那の夜」：「3つの結末」という伝説	宜野座菜央見	76
出版検閲作業のフロアーチャートから判ること	小林昌樹	81
社会労働運動のアーカイブズ：エル・ライブラリーの資料紹介	谷佳代子	86
西郷隆盛と金大中、英雄たちの「敬天愛人」	羽生浩一	93
イギリスにおける「知識への課税」(スタンプ税) 廃止の背景	芝田正夫	100
東アジアを越境する資料群：アメリカにおける満洲国関連資料	王楽	104
検閲官・佐伯郁郎旧蔵資料との邂逅	村山龍	108
香港映画資料館への調査の旅	晏妮	112
戦時下に問いを求めて：「戦時下雑誌アンケート索引」御紹介	藤元直樹	116
史料が放つ時代の空気	賀茂道子	123
「東京ファイル212」における 'new' オリエンタリズム	志村三代子	128
「民衆の図書館」を守り伝えるために：大宅壮一文庫の試み	鶴志田浩	132
英・戦中日本語学校教官の日記	武田珂代子	138
日本が建設したロシア兵の忠魂碑	米濱泰英	143
言論の自由とその危機	黒宮広昭	148

ゾルゲ事件被告グケリッチ家のオーストラリア

かとうてつらう

加藤哲郎 (一橋大学名誉教授)

ゾルゲ事件の被告フランコ・ド・グケリッチといっても、知る人は多くはないだろう。ソ連赤軍第4部(情報部、GRU)に登録された、リヒアルト・ゾルゲの組織した対日諜報団の核を成す5人組の一人である。ゾルゲは、いうまでもなく、20世紀インテリジェンスの世界で高名なマスタースパイである。日本では元朝日新聞記者・近衛内閣囑託の尾崎秀実がゾルゲの盟友としてよく知られているが、二人の協力者であるアメリカ共産党出身の宮城与徳、アヴァン通信記者グケリッチ、無線技士マックス・クラウゼンは、どうしても脇役になる。

ゾルゲ・尾崎は1944年11月に死刑、宮城与徳は未決拘留中に獄死、グケリッチは無期懲役で、酷寒の網走刑務所で服役中の1945年1月13日に獄死した。ただ一人生き延びたクラウゼンは、日本の敗戦と共に政治犯として釈放され、ソ連・東独へと帰国できた。フランコ・グケリッチも、あと1年網走で生きながらえれば、釈放されて、戦後に証言を残しただろう。

そのグケリッチの長男ポール・グケリッチさんが、オーストラリアに住んでいて、ここ10年ほど、父の足跡を追いかけてきた。日本でゾルゲ事件の国際的・学術的研究を進める白井久也・渡部富哉氏らの日露歴史研究センターを訪ねて初めて来日した時、たま



フランコ・グケリッチ

たまま私も臨席していた。その後の2013年上海、14年東京でのゾルゲ事件国際シンポジウムにもポールさんは出席し、日本の研究者・ジャーナリストとも親しくなった。

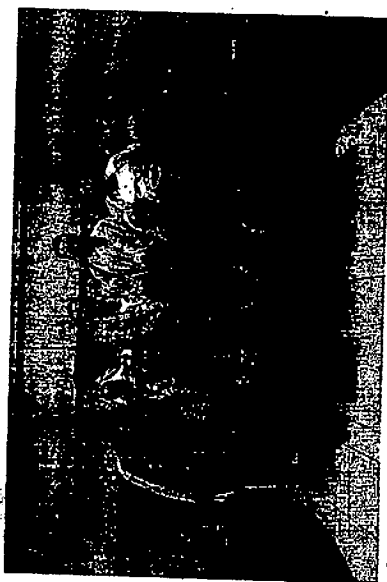
2015年12月の第9回ゾルゲ事件国際シンポジウムは、このポールさんの発案によるものであった。私自身も「ゾルゲ事件と731部隊」を報告したシドニーでの国際会議の記録は、当日配布された英文・日本語文報告をもとに、日露歴史研究センターが「ゾルゲ事件関係外国語文献訳集」特集号を公刊(編注「ゾルゲ事件関係外国語文献訳集 no.45」2016年2月)するので、関心のある方は参照してほしい。

ポール・グケリッチさんは、もともとクロアチアの名門出身でパリ大学卒の国際ジャーナリストである父フランコと、ブランクとソルボンヌ時代に知り合ったデンマーク人の母エディットとの間に、1930年にデンマークで生まれた。5歳から10歳の幼時の日本の生活を、古いアルバム写真の中に想い出していた。それが、スパイの汚名での父の異郷での獄死の発端で、離日後の母との苦難の人生の始まりであったにしても、ポールさんにとっては、かけがえのない家族の記憶であった。その資料と証言を、今日でもゾルゲ事件に関心を持ち続けている日本人々に提供したいという。

実は、日本でグケリッチを扱う際には、ややこしい問題がある。ゾルゲ事件の5人の中心メンバーは、家族愛が戦後に感動を与えた尾崎秀実を含めて、それぞれに複雑な男女関係を抱えていた。グケリッチの場合、長男ポールの記憶に残る日本での両親との生活は、つかの間のものだった。夫婦でゾルゲよりも早く日本に着任し、ゾ



長男ポール・グケリッチ



ポール・ヴケリツチ一家と日本代表団

ルゲと共に東京ゾルゲ団の中心だったブランコ・ヴケリツチは、アヴァス通信特派員としての活動を始め、ポールをデンマークのエディットの実家から呼び寄せた1936年頃には、日本の津田英学塾生・山崎淑子と知り合い、恋におちていた。エディットとポールを軽井沢に置いたまま、ゾルゲにも隠れて再婚してしまう。後にゾルゲを通じてモスクワ赤軍諜報部で離婚・再婚が承認され、東京で山崎淑子との間に、次男洋をもうける。

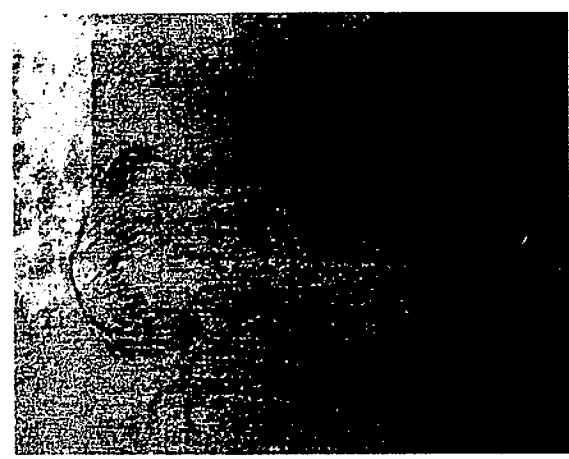
こちらの話は、山崎淑子が網走で獄死したヴケリツチの遺骨を引き取り、戦後に回想を残したため、日本有数のユージュラスラヴィア研究者に育ったポールの異母弟・山崎洋による著作と相まって、テレビにもとりあげられる愛情物語になった。山崎淑子(編)『ブランコ・ヴケリツチ 獄中からの手紙』(未知谷、2005年、初版1966年)、ロベール・ギラン『ゾルゲの時代』(中央公論社、1980年)、片島紀男『ゾルゲ事件ヴケリツチの妻・淑子』(同時代社、2006年)、山崎洋(編)『ブランコ・ヴケリツチ 日本からの手紙——ポリティカ紙掲載記事(1933-1940)』(未知谷、2007年)などの書物があり、1998年には、NHKのETV特集「私のゾルゲ事件 愛は国境を越えて ブランコ・ヴケリツチ夫人・山崎淑子」が放映された。篠田

正浩監督の映画『スパイ・ゾルゲ』(2003年)では、女優の小雪が山崎淑子役を演じて、その清楚で凛としたイメージが定着した。

他方、対日諜報活動のさなか、異国で離婚され放り出された前夫人エディットと長男ポールの物語は、数百年のゾルゲ事件関係書籍・論文の中で、ほとんど無視されてきた。戦争の時代に国境とイデオロギーを越えて愛を貫いた自立した日本人女性・山崎淑子にスポットが当てられ、夫のブランコ・ヴケリツチさえ、ここでは脇役だった。

今回のシドニー国際シンポジウムにあわせて、日本のゾルゲ事件研究を主導してきた渡部富哉氏が、改めてゾルゲ事件の中でのヴケリツチ夫妻の役割を整理し、先妻エディットの上海連絡や無電交信に果たした諜報活動上での役割、1941年9月のエディット、ポール母子の離日、北林トモ検査が始まる東京ゾルゲ団総逮捕の直前にあったことの政治的意味などを、初めて本格的に論じた。

しかし庄巻は、ポールさん自身の記憶の断片や、ポール家に残されたアルバム写真、それに英語で完成されたポールの私家版評伝、Wilma Mann, *The Paul Vukelic Story: With Respect, A Personal Journey*, 2015であった。評伝の表紙は、著名なジャーナリストであるロベール・ギランが、アヴァス通信東京支局長時代に、同僚ヴケリツチの家でスケッチした幼いポールの絵で飾られた。ブランコ、



PAUL VUKELIC, Drawing by Robert Guillin, Tokyo circa 1936-38

エディット、ポールの家族写真も残っていた。

ポールさんの日本での想い出は、つつましいが幸せな5年間であり、1941年離日後にパースに住むエディットの妹を頼り、香港経由オーストラリア西海岸に入った戦時難民母子の苦難の記憶に比べれば、ある種の場面さえあった。戦後は苦学して新聞配達をしながら高校まで通い、自動車修理・販売業で成功して、裕福なビジネス・リーダーになった。

いまや大きなスーパーマーケットの入るショッピングモールのオーナーで、6人の子供と11人の孫に囲まれたサクセス・ストーリーの原点として、ポール・ヅケリッチは、日本とのつながりを復活した。家族の2人は日本語を学び、慶應義塾大学に留学した。山崎淑子の子であるブランコの次男山崎洋とも連絡がつき、2014年東京・明治大学での第8回国際シンポジウムでは、異母兄弟が肩を並べて登壇し、握手した。私たちのオーストラリア訪問の直前、祖父の命を奪った網走刑務所の監獄を、ブランコの孫夫妻とひ孫が訪れた（「ゾルゲ事件で黙死のブケリッチ氏……孫が網走市を訪問」【毎日新聞】2015年11月7日）。

私たちから見ると、豪邸で大家族に囲まれたポールさんの今日は、移民・難民にやさしいオーストラリアの、自由で寛容な多文化社会の産物だった。第二次世界大戦中でさえ、「一億が一つ心で防諜団」となった日本のような排他的差別や迫害は、オーストラリアにはなかった。

同時に、自然とも共生した豊かな生活は、戦後オーストラリアの市民社会により醸成されたものだった。正規・非正規を問わず時給2000円の最低賃金や、手厚い雇用保険・年金制度など、かつてのイギリス労働党政権の「ゆりかごから墓場まで」の理念が、そこには残されていた。ゾルゲ事件そのものよりも、戦後70年の日本社会の達成の貧しさを、実感する旅であった。

「原子力平和利用博覧会」と「スーホの白い馬」

しらやま まり
白山眞理

（一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）

後に絵本作家として名をはせる赤羽末吉（1910～1990年）は、22歳で満洲国（中国東北部）へ渡り、絵画の腕を見込まれて満洲電信電話株式会社で広報の仕事に就いた。1943年には興安に新設される成吉思汗廟内の壁画制作グループの一員として内蒙古（内モンゴル自治区）



赤羽末吉（左は満鉄社員会報道部の甲斐八郎）1943年

の貝子廟や阿巴嘎王府を取材し、スケッチ画と写真を残している。学園寺として名を馳せた貝子廟は1966年の文化大革命で破壊され、2004年に観光資源として再建された。近代化が進む現在、赤羽の写真は73年前のモンゴルを伝える貴重な記録である。私は、これらの写真約90点を初公開する「赤羽末吉スケッチ写真 モンゴル・1943年」展を企画し、来る2016年5月31日（火）から6月26日（日）までJCIフォトサロンで開催の運びとなった。

一連の写真と、1967年にモンゴル民話の馬頭琴譚を基に赤羽が描いた絵本「スーホの白い馬」（福音館書店）には、人物や構図に似通ったところがある。衣裳などを確かめ、当時を思い起こして自らの思念を民話に託した同書は、サンケイ児童出版



「スーホの白い馬」福音館書店、1967年